

フランス語における文頭位置の副詞について

On Initial Adverbial Usage in French

青井 明 AOI, Akira

● 国際基督教大学
International Christian University



フランス語, 副詞類, 文副詞, 主題

French, adverbial, sentence adverb, topic

ABSTRACT

小論の目的は、以下の問題を考察することにある。(1) 文頭に位置するいくつかの副詞類がある。それらは、動作様態の副詞、時の副詞、場所の副詞、領域・観点の副詞、発話行為の副詞、事態評価の副詞、真偽判断の副詞、総括の副詞、そして接続副詞である。(2) 文頭位置の副詞類と動詞の右側の副詞類の構文的、意味的差異はなんであるか。いくつかの相違が観察される。たとえば、文副詞 vs. 動詞修飾副詞、特定 vs. 総称、主題 vs. 叙述、などである。(3) 文頭位置の副詞類の機能はなにか。文頭位置を占める副詞類の重要な機能の1つは、主題となることである。主題化される副詞類には、時の副詞のいくつか、場所の副詞のいくつか、領域・観点の副詞、総括の副詞、そして接続副詞のいくつかがある。

The present work aims to elucidate the following points: (1) In French, there are some adverbials which appear at the beginning of a sentence. These are manner adverb, time adverb, place adverb, domain/viewpoint adverb, speech act adverb, evaluative adverb, modal adverb, habitual adverb, and conjunctive adverb. (2) What are the syntactic and semantic differences between an initial adverbial and an adverbial on the right of a verb? There are some differences: sentence adverb vs. verb modifier adverb, specific vs. generic, and topic vs. comment and so on. (3) What are functions of the initial adverbial? One important function of an initial adverbial consists of being a topic. Adverbials which can be thematized are some adverbs of time and place, the domain/viewpoint adverb, the habitual adverb, and some conjunctive adverbs.

1. はじめに

副詞の位置は多彩で、あるものは動詞の右側に位置し、また別のものは文頭に位置する¹。つぎのように、文副詞と呼ばれるものでは、文頭に現れることが多い：

Honnêtement, Paul est indéfendable. (Molinier (1990), 31)

しかし、動詞や形容詞、副詞を修飾する副詞は普通文頭に移動できない：

La nuit dernière, il a *beaucoup* plu. (白水社・ラルース, 111)

*La nuit dernière, *beaucoup*, il a plu.

ところが、動詞を修飾する副詞であっても、文頭に現れることもある：

Lentement, le soleil plongeait dans les flots. (南館・石野(1990), 73)

Le soleil plongeait *lentement* dans les flots. (Ibid., 74)

この場合、どのように意味が異なるのであろうか。

小論では、現代フランス語において、(1) どのような副詞が文頭の位置を取り、(2) 文頭位置と、動詞の右側(動詞修飾)とではどのような構文的、意味的差異があるのか、(3) 最後に、文頭位置の副詞はどのような機能を果たしているのか、を明らかにしたいと思う。

2. 文頭位置における副詞

まず、どのような副詞が文頭に現れるか、例をあげてみよう。副詞の種類は青井(2001)に基づく。

a. 動作主様態の副詞

Calmement, Paul a lu la lettre. (青井(2001), 1238)

b. 時の副詞

Hier, j' ai fait du tennis avec mes amis. (Ibid., 1239)

c. 場所の副詞

Ici, ils ont des comptes à régler avec toi. (Kundera, 44)

d. 領域・観点の副詞

Légalement, vous n'avez pas le droit de parler. (青井(2001), 1239)

e. 発話行為の副詞

Franchement, son attitude m'est insupportable. (Ibid., 1240)

f. 事態評価の副詞

Heureusement, nous avons pris le dernier train. (Ibid., 1240)

動作主評価の副詞

Sottement, il a répondu à la question de Jean. (Ibid., 1240)

g. 真偽判断の副詞

Evidemment, il fallait que personne ne les vît. (Kundera, 98)

h. 総括の副詞

Habituellement, Paul ne boit pas. (青井(2001), 1240)

i. 接続副詞

D'abord je vais à la boulangerie ; *ensuite*, je passe à la pâtisserie. (Ibid., 1240)

上記の例の副詞は、文頭の位置が標準的(*canonique*)というわけではない。時と場所の副詞は比較的自由に、文中、文末の位置を取ることがよく知られている：

Il est rentré *hier* de voyage. (Dubois, cit. 朝倉(1967), 82)

Nous irons nous promener *demain*. (Ibid., 82)

また、eからiまでは、いわゆる文副詞であるから、文頭に現れてもそれほど不思議ではないが、真偽判断の副詞については、文中にある場合も結構ある：

L'amour entre lui et Tereza était *certainement* beau, mais aussi fatigant. (Kundera, 50-51)

最後に、文頭位置に立てない副詞について少し触れておこう。「1. はじめに」でも例をあげたように、数量・程度の副詞(代表的なものとして、*beaucoup*, *très*)は文頭に立てない。これは、副詞が動詞や形容詞、副詞を修飾していて、それらと密接に結合しているからである。ほかにも、動詞や目的語と密接に結び付いている様態の副詞も文頭位置に移動できないことがある。Guimier

(1996 : 73) から例を挙げよう :

Pierre regardait *fixement*.

**Fixement*, Pierre regardait.

Elle fronçait *douloureusement* son front et ses sourcils.

**Douloureusement*, elle fronçait son front et ses sourcils.

さらに、副詞が動作の結果を表している場合にも文頭位置が不可になる :

Le policier blessa *mortellement* le manifestant.

**Mortellement*, le policier blessa le manifestant.

この場合、*mortellement* は、動作の様態を示しているように見えて、じつは動作の結果を表しているのである。そのことは、*mortellement* を「*de manière* + 形容詞」で置き換えられないことからわかる² :

*Le policier blessa *de manière mortelle* le manifestant.

3. 文頭位置と動詞の右側の差異

つぎに、副詞が文頭位置を占める場合と、動詞の右側に現れる場合の両方の例をあげて、どのような構文的、そして意味的差異があるかを検討してみよう。

副詞が文頭にある場合は、副詞は文の残りの部分全体を修飾していると言える。それに対して、副詞が動詞の右側にあるということは、副詞が動詞を修飾する可能性があるということである。(実際には、副詞が目的語を修飾することもあるのは、上にも見たとおりである。) ここで、副詞が動詞の右側にあると述べたが、これは動詞が単純時制の場合であって、助動詞を取る複合時制の場合には、副詞は助動詞と過去分詞のあいだに置かれることもあるし、過去分詞の後ろに位置することもある :

Il travaille *beaucoup*. (単純時制) (朝倉(2002), 32)

Il a *beaucoup* travaillé. / Il a travaillé *beaucoup*. (複合時制) (Ibid., 32)

小論では、「動詞の右側」という表現で、単純

時制だけでなく、複合時制の場合も指すことにする。

3.1 文修飾と動詞修飾

まず、*brusquement* という副詞を取り上げて、文修飾と動詞修飾でどう差異があるのかを、Guimier (1996 : 80) から例を取り、その説明をみてみよう。

(a) La porte s'est fermée *brusquement*.

(b) *Brusquement*, la porte s'est fermée.

(a)の*brusquement* はドアの閉まりかたを述べていて、この文は「ドアが乱暴に閉まった」ということである。(a)は*elle a claqué* とパラフレーズすることもできる。それに対して、(b)の*brusquement* は出来事の突然の出来を表している。「突然、ドアが閉まった」ということであって、これは、*tout d'un coup, elle s'est fermée* . と言い換えることができる。実際、ドアはゆっくり閉まったかもしれない。結局、(a)の*brusquement* は *se fermer* という動詞を修飾しており、その動作の様態、起こりかたを述べている。ところが、(b)の文頭に置かれた*brusquement* はもはや、動作の様態を表すのではなく、突然の動作の出現を示しているのである。

つぎに、*sottement* という副詞が動詞の右側と文頭位置にある場合を比較してみよう :

(a) Paul a répondu *sottement* à la question de Marie.

(b) *Sottement*, Paul a répondu à la question de Marie. (Molinier (1990), 34)

(a)では、*sottement* は動詞を修飾しており、これをパラフレーズすれば、*Paul a fait une réponse sotte à la question de Marie* . ということであって、「ポールはマリーの質問に愚かな返事をしてしまった」ということである。これに対して、(b)の*sottement* は主語と動詞を修飾しており、そこから、*Paul a été sot de répondre à la question de Marie* . と言い換えられる。つまり、この文頭の*sottement* は文修飾とはいっても、文全体を修飾するというより、主語と動詞、もっぱら主語を修飾しているのである。したがって、「愚かなことに、ポールはマリーの質問に答えてしまった」という意味になる。

さらに、*rapidement*という副詞を取り上げ、Guimier (1996 : 81) の見解を紹介しよう。

(a) L'épidémie se propagea *rapidement*.

(b) *Rapidement*, l'épidémie se propagea.

(a)では、*rapidement*が*se propager*という動詞を修飾しているので、疫病が急速に広まったということを表している。パラフレーズすれば、*la propagation a été rapide, a pris peu de temps.*ということになる。それに対して、(b)では、*rapidement*は「*l'épidémie se propager*」全体を修飾し、疫病が始まるのに要した時間が問題になっている。つまり、「すぐさま、疫病が広まった」ということなのである。これをパラフレーズすれば、*l'épidémie ne tarda pas à se propager, mais la propagation elle-même a peut-être pris beaucoup de temps pour s'accomplir.*ということになる。したがって、(b)の後にはつぎのような文を続けることができる：

(b') *Rapidement*, l'épidémie se propagea, mais il lui fallut beaucoup de temps pour gagner l'ensemble du territoire.

3.2 主題と叙述

Franckel & Paillard (2000) では、前置詞句のなかで、事柄を時間・空間に定位するものを *localisateur* とし、定位される事柄を *localisé* と呼んでいる。*localisateur* が文末にあるときは、*localisé* との関係は決定論的 (*déterministe*) と称している。つぎの2文をみてみよう：

(a) Les étudiants occupent la Sorbonne *en 1968*.
(Ibid., 286)

(b) Les pêcheurs rangent leurs filets *sur la plage*.
(Ibid., 286)

これらの文では、*en 1968* と *sur la plage* というそれぞれ時間と空間を示す前置詞句が文末に置かれている。ここでは、これらの前置詞句が *localisateur* となり、その直前に述べられた事柄を *localisé* している。これに対して、これらの前置詞句が文頭に置かれると、*localisateur* と *localisé* の関係は非決定論的 (*non déterministe*) になるという：

(a') *En 1968*, les étudiants occupent la Sorbonne.
(Ibid., 286)

(b') *Sur la plage*, les pêcheurs rangent leurs filets.
(Ibid., 286)

この文頭に置かれた前置詞句は、事柄を定位するのではなく、ほかの事柄との対比関係を示しているのである。つまり、文頭に置かれた時間・空間の前置詞句は、あとに続く叙述の状況を設定するのである。*en 1968* のあとには、かならずしも *les étudiants* が続くとは限らないし、*sur la plage* のあとには、海水浴客が現れるかもしれないのである。このように、文頭に置かれた前置詞句は主題を表しているのである。主題が旧情報を表すとすると、後続の叙述は新情報を表すことになる。

この、Franckel & Paillard (2000) の分析は前置詞句について述べられたものであるが、われわれの副詞の分析にも示唆するところがある。つまり、文頭に置かれた副詞は主題化されているのではないかということである。ことに副詞が時間・空間に関する場合はなおさらである。

ここで、Guimier (1996 : 151) から、*prochainement* という時の副詞を取り上げて主題・叙述という観点から、検討してみよう。

(a) Les actes du colloque seront publiés *prochainement*.

(b) *Prochainement*, les actes du colloque seront publiés.

(a)では、*prochainement* という副詞は動詞を修飾し、新情報を示している。この文はたとえば、*Quand les actes du colloque seront-ils publiés ?* という質問に対する答えとなりうるからである。それに対して、(b)の *prochainement* は主題として機能し、今度は *les actes du colloque seront publiés* の部分が新情報になる。これはたとえば、*Que va-t-il se passer prochainement ?* の答えとなりうるものである。これに関して、Guimier はじつは (b) の文はこれだけでは、不自然だと述べている。なぜなら、シンポジウムなどのあとで、記録集が公刊されるのは普通だから、(b) の文自体が情報不足なのだと説明している。そこで、*Prochainement, les actes du colloque seront publiés et vous pourrez enfin lire les textes définitifs.* のような文になればより自然になるといっている。

つぎの例では、*soudain* という時の副詞が文頭と動詞の右側にある：

Soudain, Tereza se sentit agacée : « Ma vie, c'est mon mari, pas le cactus. » (Kundera, 111)

A présent, son pas était *soudain* beaucoup plus léger. (Kundera, 51)

これらの文を比べてみると、副詞が文頭にある場合には、後に続く叙述の突然の開始を予告し、副詞が述語の中にあるときは、突然の状態の変化を示している。

以下、時や場所の副詞が文頭に立つ場合をあげるが、いずれの例でも、文頭に置かれた副詞は、後に続く命題の時間的・空間的枠組みを設定していて、いわば舞台を設定する役割を果たしていることが看取されると思う：

Maintenant, la fatigue avait disparu et il ne restait que la beauté. (Kundera, 51)

Aujourd'hui, 3 octobre, Liliane s'est réveillée avant le jour. (Le Clézio, cit. 朝倉 (1984), 64)

Souvent, elle pensait au discours que Dubcek avait prononcé à la radio à son retour de Moscou. (Kundera, 112)

Tout à coup, elle eut envie de faire pipi. (Kundera, 34)

Déjà, elle était dans les bras de Philippe...(Benoit, 127)

Ici, elle dépendait de lui pour tout. (Kundera, 116)

なお、最後の例の *ici* に関しては、場所の副詞であるからといって、つねに文頭に置けるわけではないことに注意したいと思う。Nørlke (2001 : 259) はつぎの例をあげて、*ici* が動詞と緊密に結合しているときには、文頭に置けないことを示している：

(a1) Il viendra *ici*.

(a2) **Ici* il viendra.

(b1) Il viendra *demain*.

(b2) *Demain* il viendra.

さらに、主題を表すと考えられるものに、領域・観点の副詞がある。この副詞も多くの場合、文頭に置かれ、後続する命題が真である有効な範

囲を指定するのである。Guimier (1996 : 144) のあげているつぎの2文を比べてみよう：

(a) *Logiquement*, la première proposition équivaut à la seconde.

(b) Paul a analysé *logiquement* la deuxième Provinciale.

(a) では、*logiquement* は文頭であって、後の命題が真である領域を規定している。それに対して、(b) では *logiquement* という副詞は *analyser* という動詞を修飾していて、これは動作様態の副詞である。

この領域・観点の副詞に関しては、否定との関係でおもしろい問題があり、Mørdrup (1976) が指摘しているのを、やはり Guimier (1996 : 145) が紹介しているので、それを引用しよう。つぎの文を見ていただきたい：

Légalement, Marie n'est pas mariée.

この文の *légalement* という副詞は、文頭に置かれているが、文副詞ではない。なぜなら、否定の範囲に入っているからである。この文は、パラフレーズすれば、*Marie peut se considérer comme mariée, mais si, aux yeux de la loi, elle ne l'est pas, de fait elle ne l'est pas.* となつて、「法的には、マリーは結婚していない、実質的には結婚しているが」ということなのである。この文と、文修飾をしている、*Heureusement*, *Mari n'est pas mariée.* を比べると、この文では、「さいわい、マリーは結婚していない」ということで、副詞は否定の範囲に含まれていない。この *heureusement* は文副詞である。

そうすると、上の文は結局のところ、つぎの文とほぼ同義ということになる。

Marie n'est pas mariée légalement.

ただし、この文はあいまいである。1つの解釈は副詞が動作様態の副詞として機能している場合で、「たとえ手続きの法的性格が疑わしいとしても、マリーは結婚している」ということである。要するに、「マリーは法的に結婚していない」のである。この場合、副詞はイントネーション上、動詞と結合し、*légalement* は *en toute légalité* と言い換えられる。

もう1つの解釈は、副詞が文頭にある場合と同じである。ただし、この場合、副詞の前でポーズがあり、イントネーションの山がある。書き言葉では、副詞の前に《 , 》を付ければ、副詞は文頭にある場合と同じ解釈になる：

Marie n'est pas mariée, *légalement*.

3.3 特定と総称

今度は、副詞の位置によって、特定のな (*spécifique*) 状況を指示する文か、それとも総称的な (*générique*) 状況を指示する文かで、差異が現れるケースを見てみよう。例は Guimier (1996 : 89) から引用する：

(a) Marie conduit *prudemment*.

(b) *Prudemment*, Marie conduit.

この2文を比べてみると、(a)の文は特定の状況でも、総称的状況でも使える文である。特定の状況であれば、たとえば、*Aujourd'hui, elle conduit*. ということを目指す。それから、総称的な状況であれば、*elle est une bonne conductrice*. ということを表す。これに対して、文頭に *prudemment* が置かれた文は特定のな解釈しか許さないのである。つまり、「慎重にも、マリーは運転している」。

したがって、ある場合には、文頭に副詞を移動すると、非文法的になることがある。それは、命題全体が総称的であるのに、副詞を文頭に置いたため、特定のになり、そこに矛盾が生じてしまうのである。つぎの例を比較されたい (Guimier (1996 : 74)) :

(a) Les avions grimpent *lentement* dans le ciel.

(b) *Lentement*, les avions grimpent dans le ciel.

(c) Au décollage, les avions grimpent *lentement* dans le ciel.

(d) *Au décollage, *lentement*, les avions grimpent dans le ciel.

(a)の文は特定のな、あるいは総称的である。一方、(b)の文は特定のなである。ところが、*au décollage* 「離陸のさいには」という語句が文頭に付くと、総称的の読みになり、副詞を文頭に移動できないのである。

3.4 否定

副詞と否定の問題は非常に難しいものであって、小論でそれを正面から取り上げることはしない。これについては、Gaatone (1971), 朝倉 (1981) などを参照されたい。ここでは、文頭位置の副詞と否定の問題にしぼることにする。

まず、つぎの2つの文を見てみよう。

(a) Paul a lu *attentivement* la notice. (Molinier (1990), 35)

(b) Paul a répondu *sottement* à la question de Marie.

これらの文の *attentivement* と *sottement* はそれぞれ動詞を修飾し、同じ機能を果たしているように見える。つぎに、これらの副詞を文頭に移動してみよう：

(c) *Attentivement*, Paul a lu la notice. (Ibid., 36)

(d) *Sottement*, Paul a répondu à la question de Marie. (Ibid., 34)

副詞を文頭に移動すると、副詞が主語を修飾していることが明確になる。私の副詞の分類でいえば、(c)の *attentivement* は動作主様態の副詞であり、(d)の *sottement* は動作主評価の副詞である。これらの文の副詞がいずれも主語を修飾していることは、つぎのようなパラフレーズができることからあきらかである：

(e) Paul a été attentif dans sa lecture de la notice. (Ibid., 35)

(f) Paul a été sot de répondre à la question de Marie. (Ibid., 34)

このように、(c) (d)の文は肯定文においては、ほとんど同じ機能を果たしているように見える。しかし、否定文にすると、明らかな差異が生じてくる：

(g) **Attentivement*, Paul n'a pas lu la notice. (Ibid., 35)

(h) *Sottement*, Paul n'a pas répondu à la question de Marie. (Ibid., 34)

なぜ、(g)は非文法的になるかという点、この副詞は構成素副詞 (あるいは動詞副詞) で、この副詞は否定の範囲内にあり、否定文の文頭に置けないからである。それに対して、(h)の副詞は文

副詞であり、この副詞は否定の範囲外にあるのである。したがって、否定文の文頭に移動することが可能なのである。

つぎに、Guimier (1996 : 97) が意志の副詞 (adverbes de volonté) と呼ぶ一群の副詞に関するケースを取り上げたいと思う。Guimier は意志 (あるいは意志の欠如) を表す副詞として、(in) volontairement, instinctivement, machinalement, (in) consciemment, délibérément, intentionnellement, accidentellement, sciemment, etc. を挙げている。ここでは、volontairement を取り上げ、文頭位置と否定の関係から見ていこう。

まず、肯定文においては、副詞は動詞の右側にある場合も、文頭にある場合もほとんど意味の差異が認められない：

(a) Marie a arrêté la voiture *volontairement*. (Guimier (1996), 98)

(b) *Volontairement*, Marie a arrêté la voiture. (Ibid., 98)

これらの文では、いずれも「マリーがわざと車を止めた」ということを意味しており、副詞の位置によって、大きな知的差異があるとは考えられない。ところが、否定文にしてみると、相違が浮かび上がってくる：

(c) Marie n'a pas arrêté la voiture *volontairement*. (Ibid., 98)

(d) *Volontairement*, Marie n'a pas arrêté la voiture. (Ibid., 98)

(c) では、volontairement という副詞は否定の範囲内にあり、「マリーはわざと車を止めたわけではない」ということを意味している。つまり、マリーは車を止めたがそれはわざとではないのである。パラフレーズすれば、Marie était peut-être par hasard sur le passage de la voiture, ce qui a contraint le chauffeur à stopper son véhicule. ということになる。それに対して、(d) の文では、副詞が後続の文全体を修飾しており、文頭の副詞は否定の範囲外にある。したがって、この文は「わざと、マリーは車を止めなかった」の意味になるのである。これもパラフレーズを引いておくと、Par un acte de volonté, Marie a consciemment décidé de ne

pas arrêter la voiture. ということである。

3.5 主語と副詞に対する制約

ここでは、文頭に副詞が位置する場合の、主語と副詞に対する制約について触れる。まず、主語に対する制約は Guimier (1996 : 91-92) が述べているとおりであるので、そこから例を引こう。

主語指向の副詞、つまり動作様態の副詞 (attentivement, calmement, etc) と動作主評価の副詞 (prudemment, sottement, etc.) は、主語に対して制約があり、それは主語が / 有生のヒト / (animé humain) でなければならないというものである：

Prudemment, Marie surveillait les quais.

**Prudemment*, la caméra surveillait les quais.

2 番目の文が非文法的なのは、主語が人間ではなく、/ 無生 / (inanimé) だからである。このようにして、主語指向の副詞は原則として、主語に / 有生のヒト / を要求することがわかる。ただし、/ 無生 / の主語もまったく不可能というわけではない：

Habilement, le scénario fait raconter l'histoire du livre par Flaubert lui-même.

この場合、動作主を表すものが、述語の中に含まれているので、可能になるのである。そして、受身にした場合も同様なことが起きる：

Prudemment, Marie a refusé la demande de Pierre.

**Prudemment*, la demande de Pierre a été refusée par Marie.

ここでは、受身にしたため、主語が / 有生のヒト / ではなくなり、そのために容認不可の文になったのである。それでは、受身でも、主語が / 有生のヒト / の場合はどうであろうか：

Prudemment, le médecin a examiné Pierre.

? *Prudemment*, Pierre a été examiné par le médecin.

最初の文では医者が慎重なのであり、2 番目の文ではピエールが慎重なのである。しかし、この 2 番目の文は Guimier によれば少し不自然だという。それは、文頭の副詞の意味と、主語になっている被動作者の意味的役割のあいだに矛盾が感じられるからだという。そこで、つぎのようにすれ

ばよくなる：

Prudemment, Pierre s'est fait examiner par le médecin.

つぎに、副詞そのものに対する制約を見てみる。たしかに、Guimierのいうように、主語指向の副詞の場合には、主語が/有生のヒト/であるという制約が原則としてある。しかし、それだけではなく、ことに、-mentで終わる副詞の場合には、別の制約があるのである。

つぎの例では、動作様態の副詞が動詞の右側にあり、どちらも問題ない文である：

Paul a lu *attentivement* la notice. (Molinier (1990), 35)

Paul a lu *fragmentairement* la notice. (Ibid., 36)

ところが、これらの副詞を文頭に移動して、動作主様態の副詞にすると2番目の文は非文法的になる：

Attentivement, Paul a lu la notice. (Ibid., 36)

**Fragmentairement*, Paul a lu la notice. (Ibid., 36)

この現象は、主語が/有生のヒト/という制約を満たしているだけでは不十分であることを示している。この2番目の文が、なぜ非文になるかという、副詞 *fragmentairement* の基になっている形容詞 *fragmentaire* が人間を修飾できないからである。これは、副詞の基になっている形容詞を属詞とするパラフレーズを作ってみるとわかる：

Paul a été attentif dans sa lecture de la notice. (Ibid., 35)

*Paul a été fragmentaire dans sa lecture de la notice. (Ibid., 35)

これでわかるように、-mentで終わる副詞の基となっている形容詞が人間を修飾できないと、この副詞を文頭に置いて、主語指向の副詞としては使えないのである。

以上のようにして、主語と副詞に対する制約は、相関関係をもったものであり、主語指向の副詞を文頭に置いたための、必要十分条件となっている。

4. 文頭位置の副詞の機能

最後に、文頭に位置する副詞の機能について考

察することにする。3.2でも触れたように、Franc-
kel & Paillard (2000) では、文頭位置の前置詞句は主題となると述べている。前置詞句以外にどんなものが主題となりうるだろうか。Le Querler (2000) が、転移 (dislocation) された語句を *c'est* で受ける場合の主題化を研究しているので、それを参考にしてみよう。Le Querler (2000 : 266-267) はつぎのように分類している：

SN *c'est* SN.

Infinitif *c'est* infinitif.

P, *c'est* SN.

Le Adj., *c'est* que P.

C'est SN, Pron.

この分類の中には、副詞は出てこないが、名詞句 (SN) がある。副詞の中には、とくに、時の副詞のあるものは名詞的と考えられるから、これらは主題化されうるとみなすことができよう。時の副詞の中でも、*hier* / *aujourd'hui* / *demain* の対立は、過去に移せば *la veille* / *ce jour-là* / *le lendemain* になるから、前者を副詞とし、後者を名詞とするのは一貫性がない。前者が無冠詞名詞であると言う見解に関しては、朝倉 (1967 : 82-85) 参照のこと。

一応、名詞句と前置詞句が文頭に移動すると主題化されと考えると、これまで検討してきた副詞のなかで、どれが相当するだろうか。まず、時の副詞で、上にあげたような *hier* / *aujourd'hui* / *demain*。それから、場所の副詞で、*ici*, *là*。これらは、*à cet endroit*, *à cette place* などと言い換えられるから、前置詞句的性格を帯びていると言えよう。それから、領域・観点の副詞。*Légalement*, *politiquement*, *moralement* などは、*d'un point de vue* + 形容詞, *dans le domaine* + 形容詞 (*de* + 名詞) とパラフレーズできるから、前置詞句に相当するといえる。それから、総括の副詞がある。たとえば、*habituellement*, *généralement*, *ordinairement* など。これらは、*d'habitude*, *en général*, *d'ordinaire* と言い換えできるので、これも前置詞句的性格を帯びていると考えられる。最後に、接続副詞がある。これは非常に多様なものが集められているので、一概には言えないが、そのうちのいくつかのもの、たとえば、

à ce propos, à ce sujet, à cet égardなどは、前置詞句をなしているし、意味的にも、主題的性質を持つと言えよう。

これ以外の副詞は、どうも名詞句や前置詞句には相当しないようである。「2. 文頭位置における副詞」でもあげたほかの副詞は、パラフレーズすると形容詞や文になってしまうのである。つぎに、その例を挙げておく：

Calmement, Paul a lu la notice.

→Paul a été calme dans sa lecture de la lettre.

Franchement, son attitude m'est insupportable.

→Je vous dis franchement que son attitude m'est insupportable.

Heureusement, nous avons pris le dernier train.

→Il est heureux que nous ayons pris le dernier train.

Evidemment, Paul a raison.

→Il est évident que Paul a raison.

以上のようにして、時の副詞のあるもの、場所の副詞のあるもの、領域・観点の副詞、総括の副詞、そして、接続副詞のあるものは、文頭に置かれると主題の機能を果たしうると見なすことができるだろう。

5. 結論に代えて

「1. はじめに」で、つぎの例をあげて、どのように意味が異なるであろうか、と述べた。

Lentement, le soleil plongeait dans les flots.

Le soleil plongeait *lentement* dans les flots.

ここで、ふたたびこの問題を考えることにしたい。上の最初の例文について、南館・石野（1990：74）はつぎのように記している：

意味自体は変わらないが、出来事の起こり方に焦点が当てられる。ここでは日没という現象がどのように起ったかが問題にされている。cf. *Le soleil plongeait lentement dans les flots*. 太陽は波間にゆっくりと沈んでいった（＝「沈む」様子の修飾）。

この説明は基本的には妥当なものである。ただ、もう少し明確にすれば、*lentement*が動詞の右側にあるときは、動詞を修飾して、動作様態の副詞として働き、*lentement*が文頭にあるときは、主語指向の副詞となって、主語の状態・性質を説明しているということである。

この*lentement*に関しては、Le Goffic（1994：466）もつぎの例をあげて、

Lentement, il se redressa.

こう述べている。この文は、*il y eut quelque chose de lent, à savoir : il se redressa.*という意味であると。つまり、なにかゆっくりとしてもものがあって、それが何かというと、彼が立ち上がったということである。そして、この文は、たしかに、*Il se redressa lentement.*に非常によく似ているが、相違している点は、動作様態とは切り離されていることである。言い換えれば、「遅さ」それ自体が関与（*pertinent*）しているのであると、説明している。この最後の部分は、われわれの分析によれば、文頭の*lentement*はもはや動詞を修飾してはなしに、主語指向の副詞として、主語の状態・性質を記述している、ということになる。

参考文献

- 青井明（1997）. 結果を表す副詞について：J'ai essayé inutilement de lui téléphoner アジア文化研究，別冊7，83-93.
——（2001）. 副詞 三宅徳嘉ほか 白水社・ラルース仏和辞典 白水社 pp.1238-1241.
朝倉季雄（1967）. フランス文法覚え書 白水社
——（1981）. 副詞+pas/pas+副詞 フランス文法ノート 白水社 pp.198-203.
Franckel, J.-J., & Paillard, D. (2000). Considérations sur l'antéposition des syntagmes prépositionnels, *La thématization dans les langues* (pp.277-295). Bern :Peter Lang.
Gatone, D. (1971). *Etude descriptive du Système de la Négation en français contemporain*. Genève : Droz.
Guimier, C. (1996). *Les adverbes du français : le cas des adverbes en -ment*. Paris : Ophrys.
Le Goffic, P. (1994). *Grammaire de la phrase française*. Paris : Hachette.
Le Querler, N. (2000). Dislocation et thématization en français, *La thématization dans les langues* (pp.263-275). Bern : Peter Lang.

- 南館英孝・石野好一 (1990). フランス語を読むために 白水社
- Molinier, Ch. (1990). Une classification des adverbes en *-ment*, *Langue Française*, 88 (pp.28-40). Paris : Larousse.
- Mørdrup, O. (1976). *Une analyse non-transformationnelle des adverbes en -ment*, *Revue Romane*, 11, Copenhagen : Akademisk Forlag.
- Nø lke, H. (2001). *Le regard du locuteur 2*. Paris : Kimé.

用例出典

- 朝倉季雄 (1984). フランス文法メモ 白水社
- (2002). 新フランス文法事典 白水社
- Benoit, P. (1980). *Le déjeuner de Sousceyrac* 朝日出版社
- Kundera, M. (2006). *L'insoutenable légèreté de l'être*. Paris : Gallimard.
- 三宅徳嘉ほか (2001). 白水社・ラールス仏和辞典 白水社

注

- 1 Nø lke (2001 : 237) は、たとえば *peut-être* はつぎの文の番号の箇所に現れるという : 1.(que) Pierre, 2., a 3. vendu (4.) sa voiture, 5..
- 2 結果を表す副詞については、青井 (1997) 参照。